高齢期の社会化における「語り」の意義

阪　本　陽　子

（文教大学付属教育研究所客員研究員）

Meaning of “Narrative” in Socialization to Old Age

SAKAMOTO　YOKO

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)

要 旨

高齢期の社会化とは、予期的社会化と回顧的社会化のバランスを保ちつつ、後続世代の社会化を促す最年長の担い手としての位置づけへ移行である。しかし、家族の社会化機能の低下やバランスを欠いた高齢者政策が、現代社会における高齢期の社会化を効果的に促していない。高齢期の社会化を促す方策の一つとして、高齢期における「語り」の意義を検討し、その実践に向けた学習のあり方を考察した。

１．はじめに

人生における高齢期という位置づけに、自己をどのように社会化させるのか。これは、私たちがこれまでにないほど、多様性に富み、長い高齢期を過ごすにあたって、興味深い課題である。

先行世代が経験しえなかった未知の時代を迎え、現代の高齢者は高齢期に社会化されているのだろうか。人々の生活様式、家族のあり方など社会構造が変容していく中で、高齢期へ人々が社会化していく方策を、社会が整えていく必要があるのではないだろうか。

２．高齢期の社会化

１）高齢期の発達課題

エリクソンは、人間は乳児期や児童期だけでなく、成人期、老年期にも発達するというライフサイクル論を提唱した。このように、人間が出生から死に至るまでの生涯を通じて発達する能力を持っているという生涯発達の考えは、広く一般的な概念となった。エリクソンは、生涯における変遷期の出来事を八段階の区分に分け、人間の発達過程の各時期には、それぞれの発達課題があるとした。

ライフサイクルの第八段階にあたる高齢期は、それまでの生涯の全てを自分のものとして受け容れ、それを統合していくという「自我の統合性」と、死への恐怖や望みを失った生活がもたらす「絶望」との拮抗のバランスを保ち、次の世代への関心を持ちながら生きなければならないという発達課題が示されている[1)]。

また、ハヴィガーストは、人生の各期における発達課題を成就すれば個人は幸福になり、失敗すれば不幸になるという考えを示し、高齢期の発達課題を以下のように示した[2)]。

・肉体的な力と健康の衰退に適応すること
・隠退と収入の減少に適応すること
・配偶者の死に適応すること
・自分の年頃の人々と明るい親密な関係を結ぶこと
・社会的、市民的義務を引き受けること
・肉体的な生活を満足に送れるように準備すること

このように、人生には発達段階があり、高齢期にも特有の課題があって、その課題に首尾よく適応し、社会化していくことが求められている。

2）高齢期の社会化理論

乳幼児期や児童期、青年期という人生の初期における社会化については、「一人前になる」ことを目標とし、各成員が所属ないし準拠する集団における地位（＝役割）を修得・取得することを通して、当該の社会構造の維持または発展に至る過程であると考えられる。

しかし、いわゆる一人前になってからの社会化については、生産性と創造性を目標とした成人社会化であり、再社会化、相互社会化、回顧的社会化などの概念で説明される。

回顧的社会化とは、予期的社会化と対照的に、「ライフサイクルのそれぞれの時点において、自らの過去を振り返り、来し方の人生を自分なりに評価し意義づけるとともに、新しく意味づけられた自己の存在理由に基づいて、その後演ずべき社会的役割をフィードバック的に再規定するという方向性を示す[3]」ものである。

予期的社会化	⟺	回顧的社会化
未来にむけての自己の確立を図る志向性		来し方の自己の評価と新たな自己評価

高齢期の社会化は、ハヴィガーストが示した発達課題に見られるような、社会的喪失、肉体的機能低下などに対する予期的社会化を示しながらも、自己再帰性（社会行為の中で他者に与えた影響の刺激が自己に帰り、新たな自己を形成する）による再社会化を含み、過去の自己からの自己再規定、すなわちエリクソンが発達課題として示す「自我の統合性」であるアイデンティティの再構築に繋がる回顧的社会化を強く示すものである。

そして、「子どもや後輩を社会化する主体として、自分の経験した社会化を振り返り、その個別性と特殊性を否定すると同時に超越しなければならない[4]」という超越的社会化の実践が、高齢期の社会化に求められる。それはエリクソンの当初の理論では想定されていなかった人生の最終局面である「第九段階」において、成熟と英知に向かう過程である「老年的超越性」という概念に繋がるものであると考えられる。

高齢期の社会化は、予期的社会化と回顧的社会化のバランスを保ちつつ、後続世代の社会化を促す最年長の担い手として社会に存在する、という位置づけへ移行していかなければならない。

3．現代社会における高齢期の社会化

1）家族の社会化機能の低下

家族機能の一つとして、社会化機能がある。家族は子どもを育て、教育する機能を持ち、子どもは家族の中で人間性を形成し、文化を内面化して、社会に適応する能力を身に付けていくというものである。家族の社会化機能は、子どもに対してのみが注目されるが、家族は、その構成員を「父」、「母」、「子ども」という役割、兄弟姉妹における「兄」や「妹」などの立場、成長しながら身に付けていく「大人」としての態度など、生育環境や発達過程に沿ってそれぞれの役割に社会化させる機能を持っている。つまり、人が家族の中で成長し、家族の中で役割が変化し、家族によって社会化されることによって、その外側に広がる社会に適応する能力を身につけるというプロセスがある。したがって、家族の社会化

機能の対象は、子どものみならず、全ての構成員の生涯にわたるものとして考えられる。

昨今の状況として、伝統的な家族機能が変容していることは周知のごとくである。家族規模が小さくなり、核家族化が進み、従来の家族における性的役割にも変化がみられる。そのような変容が、家族の社会化機能を低下させているという指摘は多くみられる。家族の社会化機能が子どもに限る機能ではないのであるから、高齢者の社会化もまた、その失われつつある機能の対象に含まれると考えられる。

伝統的な社会では、高齢期になると、生み育てるという直接的な育成の時代を終え、家族の中で最年長となる。そして、孫という新たな世代の誕生で、人生における自分の位置の自覚、後続世代へ伝承していく事柄やそのタイミングを見極めていく。それが伝統的な社会に見られた「老人」の位置であった。

しかし、昨今の家族形態の変容、三世代同居の減少傾向[5]により、家族機能が持っていた高齢期の社会化機能も失われつつあるといえるのである。

2）地域社会における社会化の必要性

1960年代後半から70年代にかけて、人口の高齢化が問題となり、その後の高齢化率は加速の一途をたどっている。高齢者政策が急務の課題となった中で、先進国の多くは、活動理論を中心にその政策を展開してきた。急速に高齢化の進んだ日本もその例外ではなかった。

活発な社会的活動を行なう高齢者像を理想とし、「生涯現役」を幸福な老いのイメージとして掲げてきた。現役を退いて次の世代に引き継ぐという考えそのものが、若さを失っているとして否定されることにも繋がった。

最近では、老後は好きなことを気ままにして過ごし、趣味や楽しみだけを追及する生き方が脚光を浴びている。老後の時間やお金の全てを、自分の楽しみだけのために使いたいと思う高齢者も少なくないだろう。そこには、子どもや後輩を社会化する主体となった社会の最年長者としての姿は見られなくなってきている。

これまでの高齢者政策は、高齢期の社会化に必要な予期的社会化と回顧的社会化のバランスを十分に保った社会化の環境を作り出しているとは言えない。衰えを見せない高齢者の非凡な活躍ぶりに注目を集めさせ、過去への回顧よりも、「今をいかに楽しく生きるか」という視点に関心を寄せさせてきたといえる。超高齢社会の到来により、高齢者を取り巻く福祉や介護などの社会保障費の増加傾向が強まると、介護予防などの予期的社会化には多くの注意が払われてくるようになったが、もう一方の回顧的社会化にはあまり関心が向けられないのが現状である。

このように高齢期の社会化が効果的に行われていない状況に対し、地域社会でその社会化を促進する環境づくりをする必要性がある。子どもの社会化は、家庭の教育力の低下が叫ばれる中で、その担い手を地域社会に求める動きがあるが、高齢者の社会化もまた、家庭におけるそれから、地域におけるそれへ、期待されるものの一つとして捉えられる時代が到来したのではないだろうか。

地域社会で高齢期の社会化を実践していく方策の一つとして、高齢期における「語り」の場の創造というものを考えてみたい。なぜなら、これまで述べてきたように、高齢期の社会化には、それまでの経験を振り返りながら自己を統合していくプロセスが必要であり、「語り」はその構造を持つものであると考えられるからである。

4．「語り」と自己

1）物語構造の学習と「語り」

私たちは、「象徴形成能力（言語あるいは他の形式により表わす力）」と「物語形成能力（文法を作り出す力）」を持って生まれ、

両親をはじめとする先行世代から、新しい「象徴」と「言葉」とその言葉の中に位置付けられるための「物語の構造」を学習する。この学習プロセスは、新しい物事や感情との出会いなど、人生において新たな局面を経験した時に再び必要となり、人は新しい物語の構造を一生涯にわたって学習しながら生きていく。

このように、人は「物を語る」ということを学習、経験しながら発達する。新しい物事との出会いが、常に新しい物語の構成の仕方、表現の方法、伝達の手段を獲得させていく。

この「語り」という行為は様々な場面で行われるため、文学の朗読にも、自己の体験談にも、同じ「語り」という語が用いられている。研究領域は文学や民俗学、心理学や社会学など多岐にわたり、その語の共通定義はない。ライフヒストリーやライフレビューの研究は、語ること、語られた中身についての分析を行うが、人生回顧の語りだけがその対象である。しかし、この研究においては、その枠組みを少し広げて考えてみたい。

そこで、この研究における「語り」について、おおよその概念を示しておきたい。

まず、この研究における「語り」とは、「自己の独創の言葉で物を語ること」である。台本のある科白としての言葉ではなく、自己の言葉として発せられるものである。それは、人生の物語のみならず、既存の物語においても存在しうるものであると考えられる。

イソップ童話の『ウサギとカメ』や『北風と太陽』は、おそらく多くの人がそのあらすじを知っているだろう。しかし、これらの物語をどのように解釈し、どのような言葉で、どのように表現し伝えるかは、十人十色であるだろう。なぜなら、その人の経験の中から得た言葉や物の見方が表出され、物語に、その人となりが現れるからである。それは、この研究における「語り」であると捉えている。

さらに、「語り」は、設定された場だけではなく、日常生活のあらゆる場に「話し／喋り」と混在しながらも、ある境界を持ちながら存在しているものであると思われる。（表１）

語り	・筋があり、一つの方向へ進む ・意図的 ・受信者が限定＝役割の固定化 ・状況から独立し、一定の形式を持つ ・発信者と受信者の共同行為として成立する
話し／喋り	・筋がなくても成立し、自由な方向へ進む ・無意図的 ・受信者の変更（増減）あり＝役割の変動 ・状況に依存 ・双方向性ではあるが、一方的でも成立する

表１「語り」と「話し／喋り」

２）自己再構築のための「語り」

「語り」は、それが自己のライフストーリーであっても、仮想の物語であっても、自己を表出させる行為であると考えられる。出来事を描写する外向的な行為と同時に、自己反省と自己理解を可能にする内省的な行為である。つまり、語りによって表出された自己とは、過去の様々な経験によって作り出された自己であり、語りによって自己回顧が促されるのである。

そして、語りは語る者と語られる者との間の共同行為であり、社会から付与された役割が、自己を語りなおす力となり、自己認識の仕方やアイデンティティの変化をもたらす行為となる[6]。この過程が、語りによる自己再構築である。図１で示すように、語りはその構造を持っている。

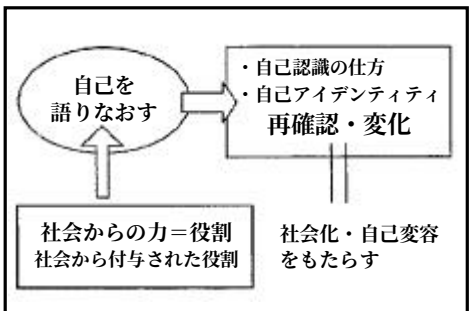

図１　語りによる自己再構築

５．高齢期における「語り」の意義

高齢期の社会化を促す語りの場は、日常的な家庭の場において失われているだけでなく、高齢者の語りそのものを否定的に捉えるまなざしがあるともいえる。回顧への否定的見方が高齢者を語りから遠ざけ、高齢者が過去を語ることは、過去への執着、繰言などとみなされる。さらには、そのような語りが精神医学の領域において、心理セラピーや、治療法[7]として用いられていることも、語りを否定的に映す要因として考えられる。

しかし、自己再構築の構造を持つ語りは、高齢期において主に二つの意義を持つと考えられる。その一つは、自己統合への導きである。ロソーは、高齢期への移行にみられる特徴を、「通過儀礼の欠如」「社会的喪失」「役割の不連続性」であるとし、「低い価値を与えられる」「役割なき役割」への社会化であるとした[8]。社会的役割が減少し、不明瞭な役割への社会化は、曖昧な地位へ陥り易い状況となる。ゆえに、ライフサイクルの中での自己の位置を確認し、他世代との均衡を図り、歴史的連続の中で自分の場所を受け入れていくための自己認識への手立てが必要となってくる。語りによる自己再構築は、自己を統合し、世代のサイクルの中に居場所を確認する行為となる。

もう一つは、「祖父母的生殖性」の発達である。エリクソン示した人生発達過程の第七段階は成人期であり、その課題は「生殖性(generativity)」である。“generativity”はエリクソンの造語であり、「世代性」「継承性」とも訳される。「生殖性」とは、子孫を生み出すこと、生産性、創造性を包含する概念であり、子どもを生み育て、次の世代を確立させ導くことへの積極的な関心、関与である。

高齢期は、この「生殖性」からさらに広い意味での生殖機能としての「祖父母的生殖性」を発揮する。祖父母的生殖性は、直接的な生殖の関与から一歩引いた位置で自己の生殖性を回顧し、他の世代の世話をするとともに、生殖性のサイクルの中で若い世代の人々の中にある生殖性の感覚を強化する機能を持つ。つまり、今日の社会の中の最年長者として、若年者が将来を担う責任ある大人になるための指導に貢献すること、そして、そのために信頼たりうる人物となろうとすることは、祖父母的生殖性がもたらす機能である。

筆者は、この祖父母的生殖性の中には、「遺す」という感覚が含まれるものであると考えている。産み養うという直接的な生殖行為から、次世代が生き抜く力や知恵を授け育む行為への転換の中で、「遺す」という感覚の発生が考えられるのである。自分が若年者の将来のために何を「遺す」ことができるのかという感覚は、この祖父母的生殖性の機能であり、高齢期の語りは、自己回顧、再構築、統合を受けて、この祖父母的生殖性を発達させるものであると考えられる。

６.高齢期の社会化を促す地域の実践へ

１）語りの場の創造

地域社会で高齢期の社会化を促す実践は、生涯学習・社会教育における課題として掲げていくべきものである。高齢者施設や生涯学習施設、大学など、高齢者に学習機会を提供する各機関が、高齢期の社会化を促す実践に取り組んでいくことが望まれる。

介護予防や後期高齢期の生活設計の立て方などに注目し、予期的社会化を促す学習機会の提供と同時に、ライフサイクルにおける自己の位置づけや、後世に遺すべき事柄やタイミングを意識する回顧的社会化を促す学習機会を提供し、高齢者学習のあり方の中に高齢期の社会化の視点を盛り込んでいく必要がある。

高齢者学習における人生回顧については、これまでも、自分史の学習や、戦争体験をまとめる学習などがみられ、活発な学習活動も報告されている。しかし、自身の生い立ちや体験を赤裸々にさらけ出すことには、抵抗を

感じる人は少なくない。人生回顧そのものを正面から提示してしまうと、抵抗感が生じる。むしろ、「語り」を一つの学習方法として、高齢者に語る時間と空間の場を創造していくことが重要なのである。

これからの高齢者学習のあり方として、高齢者の単なる居場所作りとなる「お楽しみ」の機会を提供するのではなく、高齢者を高齢期に社会化させるという意図を持って実践していくことが望まれる。それは、高齢者が自ら発信する「語り」を取り込むことで、その機会の提供となりうることができる。そして、これまでの高齢者の学習機会に見られるような、計画された活動に参加するという消費者的、受身的な参加ではなく、自ら発信する創造性を持ったプログラム作りが求められている。そこに、高齢者が築いてきた知恵を、地域に遺していく方法が見えてくるのではないだろうか。

２）おわりに

「語り」と、「話し」や「喋り」は日常的に混在している。学習講座に参加している高齢者のお喋りの中に、「語り」が現れた時、学習は次の過程に移行して行く。学習を提供し、支援していく者が、その移行をどのように捉えることができ、現れた「語り」をどう取り込んで学習を発展させていくことができるかに、現場の力量が試される。

本研究において考察した「語り」の意義について、さらに実証的な研究をすすめていきたい。

【注　釈】

1）E.H.エリクソン、『幼児期と社会1』、みすず書房、1977、pp.317-353

2）R.J.ハヴィガースト、荘司雅子監訳、『人間の発達課題と教育』、玉川大学出版部、1989、pp.25

3）浜口恵俊、徳岡秀雄、今津孝次郎、「日本人における成人社会化の基本特性―社会的経歴の分析を通して―」、日本教育社会学会編、『教育社会学研究第31号』、東洋館出版、1976、pp.40-53

4）青井和夫、「社会化再考」、日本教育社会学会編、『教育社会学研究第31号』、東洋館出版、1976、pp.5-16

5）1980年50.1%、1990年39.5%、2002年23.4%（内閣府資料、『平成16年度版高齢社会白書』）

6）病の語りや被差別者の語りなど、ある付与された「役割」について語りなおすことで、自己の再構築になっていることは、社会学、心理学の研究で指摘されている。

7）回想法は認知症の療法として、ナラティブセラピーは病の受容などの心理療法として、「語り」を用いている。

8）I.ロソー著、嵯峨座晴夫監訳、『高齢者の社会学』、早稲田大学出版部、1983

【参考文献】

E.H.エリクソン著、『ライフサイクル、その完結＜増補版＞』、みすず書房、2001

E.H.エリクソンほか、『老年期　生き生きしたかかわりあい』、みすず書房、2001

やまだようこ編著、『人生を物語る―生成のライフストーリー―』、ミネルヴァ書房、2000

T・グリーンハル／B・ハーウィッツ編、斎藤清二／山本和利／岸本寛史監訳、『ナラティブ・ベイスト・メディスン　臨床における物語と対話』、金剛出版、2002

天田城介著、『〈老い衰えゆくこと〉の社会学』、多賀出版、2003

山口智子著、『人生の語りの発達臨床心理』、ナカニシヤ出版、2004